

『盆山』劇中、泥棒が鯛の真似をする一幕

速会場に笑

台詞も述べ の象徴的 る」と、狂 の者でござ 盆山 世界に引き込 客は舞台の られると、観

匡氏と息子・弘晃氏

(左から)

は会場が幾度もどっと笑いで沸くなど、盛況となった。16日の公演前には サンパウロ(聖)公演」が11月15、16両日、聖市リベルダーデ区の文協大 能楽演者向けのワークショップが行われ、喜劇の裏に散りばめられた日本 聖市内の日伯文化連盟(アリアンサ、大城幸夫理事長)の文化センターで 講堂で開催された。両日計約1100人(主催者発表)が来場。公演中に 伝統文化の奥深さが垣間見られた。また、小笠原氏は本紙の単独インタ ビューにも応じ、伯国の日系社会に対して狂言が持つ力などを語った。 HISプラジル (佐々木伸仁社長) 主催の「狂言師小笠原匡 (ただし)

介が、実演も交えながら一泥棒だ)」と開口一番。 でゆっくりと登場した。 ちに待った観客の前に小 さん)』の上演となり、待 た。その後、いよいよ一 あらすじ解説も行われ 笠原氏の息子・弘晃(ひ つ目の演目『盆山(ぼん きで実施。今回の演目の 泥棒だ)」と開口一番。観「Eu sou ladrão (私は この泥棒は、物色してい にその屋敷に忍び込んだ だと気付くが、どうせな づかれてしまう。主人の る時に主人(匡氏)に気 を羨ましく思った近所の をたくさん持っている男 方はこの泥棒が顔見知り 男が、盗みに行く話。夜 風景をかたどった置物

続いて披露されたもう

声は絶えなかった。

観客を魅了し、

れる泥棒に向かって、 おる泥棒に向かって、 て鳴き真似をして、気づ うと、泥棒は必死になっ り(こぶうり)』。太刀を つの演目は、『昆布売

原氏から狂言の特徴の紹 16日の公演冒頭、小笠

人(弘晃氏)に太刀を持りがかった昆布売りの商 商人は、頭に来て太刀を 持った大名(匡氏)が、通 は大名に昆 転してしまい、この商人 たせてみる。持ち方が悪 抜く。ここから立場が逆 いなどと散々なぶられ 布を売らせ 過り節(おどりぶし)、踊 (うたいぶし)、 () 海瑠璃 古 () からの () か

ガル語に、早 突くポルト 客の意表を

ガル語を織り交ぜなが 昆布売は太刀も奪って逃 刺劇だ。こちらもポルト る、立場逆転の痛快な風 げ去っていく。 んどんとエスカレートし いつの時代にも通ず

タンディングオベーショ と語ると、観客からはス ルに来て、皆さん方に新 あいさつに立った小笠原 の魅力をお見せしたい」 氏は、「またぜひブラジ 目)をお見せして、狂言 公演終了後、舞台上で

会がないという。「印象で、まり日本文化と接する機関を 立ったりといった一瞬一 市内在住のカイロさん

説も良かった」と楽しん 後にした。(河)(つづさ。(劇中)ポルトガル語 (かえって)分かりやすさ。(劇中)ポルトガル語 (かえって)分かりやす瞬(の所作)の素晴らし ポルトガル語があって (古い日本語の台詞も) はない日本語の台詞も) は、「日本で狂言をいなかったのはない。日本の文化を知らないなかったのは、日本の文化を知らないない。

詰められた泥棒が、扇りのを迫られる。追い 笑い。そのまま「タイタ 見立てると、会場は に立て、鯛の尾ヒレ (おうぎ)を開いて背

愚かさが観客の心をくす

及する事業は、本業であ

と意気込んでいた。 特別なことをやれたら」

レストランがあり、

的な顧客を増やすこと

た悪あがきをする泥棒の

と共に大きな拍手が送ら からはけていくと、笑い イ」と鳴きながら舞台上

月2日にリベルダーデ ジル国内4店舗目とい い旅行代理店である。5 駅前に支店を構え、ブラ では非常に知名度の高 たHISブラジル。日本

う。今回のようなプラジ ルに日本文化を紹介・普 1の来伯公演を主催し しているという。「来年 していて、狂言公演をよ 110周年なので何か は(ブラジル日本移民) 浄瑠璃、文楽なども考慮 り充実させたものとか、 た日本伝統文化のイベ にもつながるとか。 ントは来年以降も検討 木社長によると、こうし

れたての食材が並んでいるがありとあらゆる取りに、野菜や果物、魚介類 り(中央卸売市場)に行 れたての食材を使ったいる。その一角には取 区にあるCeages ラ・レオポルディー サンパウロ 聖

アラカジェもあり、 料理・セビーチェも 鮮そのものだ。また、 発祥のパエリアや、ペイイ ルーやメキシコの名

いる。新鮮な魚介類 鮮が食べ放題となっ 在はシーフード・フ スタが開催中。70レ (ドリンクは別)で を曜日は午後5時) 年から午前0時、日曜日は正午から午後5時) まで。 スタは今月17日(水から、料理を食べられる同フェースを) パリエーションだ。サーバリエーションだ。サー 聖)市か

かが付くと2時間が過ぎをの日は帰路で、バスにその日は帰路で、バスにその日は帰路で、バスにであると眠ってしまい、気 正 20分ほどで通過できた。 ・ 通りの渋滞はひどい。今 ・ が、最もスムーズな時は ・ でが、最もスムーズな時は る道がある。中でもリオ までのバス移

イ だったこともあるが、片 側4車線完備で、あの渋 できったという。休暇や年 経路だという。休暇や年 を変帯行きの車が通る こうか。時間に余裕のある したい、午前中や夕方の あるいが、片 には、午前中や夕方の 通過を避けることを 景色だった。翌日が祝日 、外は全く同じ



※この記事は新聞社の許可を得て掲載しております。



言われている。 芝居の中で世界最古とも えることなく続いている

(ただし) サンパウロ 公演は始まった。

衆芸能・散楽(さんがく)

代に唐から渡ってきた大

能楽の前史は、奈良時

ている」と語った。

原氏自身による解説から 能楽と呼ばれるが、能楽 狂言は遡(さかのぼ) る。能と狂言を合わせて 時代に現在の様式に近い 言とは何か、という小笠(聖)公演」。そもそも狂 ものが確立されたとされ 者向けのワークショップンターで行われた能楽演 城幸夫理事長)の文化セ また、同16日に日 (アリアンサ、大

『生』をテーマにし

の日本の「神に祈りを捧 形が整ってきた」ものと は、それより以前の太古 げる儀式からだんだんと が一般的だが、小笠原氏 の影響から語られること

こと)を取り出して広 に扇(おうぎ、せんすの 鑑賞者に想像させ、感じ 具、所作で多くのことを 棒が犬の鳴き声を真似た として使う際を例に取 現されたが、これも狂言 際には「びよびよ」と表 今度は扇を箸(は

切っては切れないから、 2つに1つなのでは思っ として紹介した。 番叟(さんばそう)』を 持たない祈祷の舞の演目 て、『翁(おきな)』と『三 所作が残っている例とし 実演しながら説明して 明確なストーリー

れた舞台装置や衣装、道 性。狂言は、非常に限らみせたのは、狂言の表象 ものも少し変わってい で使用される擬音語その 自身が口で発して鑑賞者 用意することもなく、 に想像させるのだ。狂言 から流すこともなく、扇 体の効果音をスピーカー つで、雫の音まで演者

座」といった基本的な狂 したのでは」と論を展開 きな民族だからこそ誕生 ることや信じることが好 構え」、「いだつ」、「正 見えないものを想像す ワークショップでは、 仰する民族として、

屋敷の戸を開ける一連の 動きなどを、実演を交え 言の所作から、笑い方、 ドロ・プッポさ は、「凄いと思 ん(30、非日 のジョアン・ペ

てもとても深くて難しい ということ。重い物を動

ながら参加者に指導。身

情で汗を拭いながら語っ と感じた」と、充実した表 (想像すること)が難しい

として本物のとつくりを も言及。こうして小道具 (擬音語と擬態語) にでもなりうると指摘。 アニミズム信仰を持ち、 やおよろず)の神々を こうした鑑賞者に想像さ 体の持たない八百万 る特徴を持つ狂言は、 箸の素材や色も鑑賞

などが説かれ クショップに参 きを伝えるこ うを持って動 とにつながる 一足分(約30セ 楽経験約1年半 ンチ)の動きで 終了後、





※この記事は新聞社の許可を 得て掲載しております。



単独インタビューでは、 ノラジル日系社会への思 や狂言の持つ力を聞 を行った和泉流狂言師 一回公演とワークショッ 11月15、16日に来伯し

2回ともサンパウロ市リ 会からの来場を見込んで HISブラジル(佐々木 世界」の好評を受けて、 相談を受けたという。 、ルダーデ区の文協大講 今回の公演は、日系社 入れを語った。 メージも凄く良くて。 いて、日本に対するイ やつばり移民の方々の努 のがブラジルに浸透して

の際には、外務省の派遣 での活動をはじめ、ヨージルに限らず、フランス では、伝統仮面劇・コン 活動している。イタリア 代社会への風刺に富んだ メディア・デッラルテと ロッパ諸国でも精力的に また、小笠原氏はブラ

ブラジル日本移民90周年 堂で企画。1998年の

15年7月に日伯修好1 は2年ぶり4度目。20

今回の小笠原氏の来伯

20周年の公式事業とし てSESC(サンパウロ

日系社会への理解も深 地を回った経験もあり、 公演で1カ月間伯国内各

えて通ずる普遍性が理由 組みも構想しているブラジルならではの取

り』という演目選択も、 日本の伝統的なものを紹 や、立場逆転の風刺の笑 視覚的に楽しめる要素 けた。『盆山』と『昆布売 夫も観客からは好評を受 を織り交ぜるといった工 なったが、ポルトガル語 たため、古典演目2本と 介することに重きを置い ての側面も持つ 、革新的な狂言師 作演目も発表するな 一回の伯国公演では、 ラジル創作狂言』を作

界では珍しい。「もとも を取り入れようとする小 てみるとか。ここ (ブ 紹介したり、海外の文化 がする」と語り、実験的 して)僕が演出してや 姿勢を覗かせた。 な取り組みにも意欲的な ジル)だったら、できる 指導・育成を重ねるなど んじゃないかなという気 こうした海外で狂言を (伯国の能楽演者の

うつかりしている大名と 立派なはずの地位なのに を映す鏡」と語る小笠原 なのではと思えてくる には笑える。しかし、見 らこそ、離れて見る観 る。そうした人物も、と 代にもどんな地にも いった人間像はいつの時 を働こうとする泥棒や、 氏。ほんの出来心で悪 ているうちに段々と笑え ても愚直で必死だ。だか 笠原氏は強調している。 在り方にまで広げ、笑い とではなく、人としての 文脈では演者に限ったこ のこと。もちろん、この ら自身の演技を見る意識 のルーツを大切にしよう の奥の道徳的な側面を小 そうした狂言が、自身

を通じて、(日系人も日 ではなくて、豊かな笑い ではなくて、豊かな笑い

り、目を輝かせていた。

目を輝かせてい

を、記憶喪失から目覚め

本人も含む)私たちの先

をもち、あらゆる方向か 体を離れた客観的な目線 成者、世阿弥(ぜあみ)の 言葉で、演者が自らの身 ことが長けている、

サンパウロ新聞社 saopau losh inbun, om 購読料金半カ年 R \$ 435,00 東京 支 社 東京都江東区東陽 5 - 16 - 1 石川マンション 302 号室 電話:03-5633-7596 (代表) FAX:03-5633-7597

期的にお邪魔できるようか、との記者の問いに定 ジルのネタで、例えば ういうものを題材に 話とか民話とか風習、 になったりしたら、ブ はないので、私はそうい ます。 か伝統の魅力を発信した かを逆輸入して、狂言と

また、「喜劇とは自分 えるようになった」。 知るとか、自戒の念とか、 はなくて、自分のことを べき役割というのは、た 離見の見(りけんのけん) ではないか。そう最近思 喜劇が社会に果たす

との生き方があると指摘 ういう行為によってコ じる、感じる、想像する 小笠原氏は語る。「(日本 る」とし、そうした日本 ミュニケーションが図れ るいは)好きだ。また、そ 人は)見えないものを信 人の気質の背景には独特 、(あ

※この記事は新聞社の許可を 得て掲載しております。